

神戸ビエンナーレ 2011 [高架下アートプロジェクト] 作品
‘銀の雨・金の環’

KOBE BIENNALE 2011 KOKASHITA ART PROJECT
“RAIN OF SILVER, GOLD RINGS”

戸矢崎 満男 デザイン学部ファッションデザイン学科 教授

藤山 哲朗 デザイン学部環境・建築デザイン学科 准教授

Mitsuo TOYAZAKI Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Professor

Tetsuro FUJIYAMA Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor

要旨

神戸ビエンナーレ 2011 [高架下アートプロジェクト] コンペティションに入賞し、元町高架下の元店舗を会場として、中古ボタンを大量に使ったインスタレーション作品 ‘銀の雨・金の環’ を神戸芸術工科大学チームが 2011 年 9 月に完成させた。チーム代表である 2 名の筆者が、それぞれの制作意図を図面や写真を使い明らかにする。

Summary

The Kobe Design University team produced an installation work “Rain of Silver, Gold Rings” with a great quantity of used buttons, on September 2011. It had won the competition ‘KOBE Biennale 2011: Kokashita Art Project’ located on the vacant stores in the Motomachi Kokashita (under the elevated railroad) shopping street. In this article, two representatives of the team threw light on the each intention of the work, with drawings and photos.



図1. 会期中（娘の肩を抱く父）

1 | はじめに

“神戸ビエンナーレ 2011[高架下アートプロジェクト]コンペティション”に書類応募し入賞した作品‘銀の雨・金の環’は、神戸芸術工科大学チームにより制作し、完成後の第2審査で「奨励賞」を受賞した。公募を主体とした神戸ビエンナーレは2007年に始まり、3回目を迎えて初めて元町高架下（通称モトコー）を会場に加えた。第1回より主たる会場をコンテナとしていたが、神戸独自のスペースとはいえない。モトコーには固有の歴史があり、特異な空間であり、商店街としてシャッター通りの問題を抱える点でも意義深い。筆者^{*1)}は、自身の震災体験もふまえ、アートとしてはユニークな場所を魅力として捉えた作品コンセプトを掲げた。

2 | コンセプト

1次審査に応募した書類上のコンセプトは以下である。「1977年に『銀の雨』という歌がヒットしました。銀は美しくとも重く冷たいものです。現代は、まるで銀の雨が

降り注いでいるような時代ではないでしょうか。作品は、闇を表す群青色に天井と壁面を塗り、天から数千の銀色鈕（ボタン）を降る雨のように吊り下げます。そして、水色の地（床面）に落ちると、雨は金色とカラフルなボタンで環（波紋）に変わります。それは、未来を映す鏡として光を暗示しています。

1994年より、私は神戸のリサイクル店などの協力で不要のボタンを集め、現在は数十万個に達しています。古着の一部は「ウエス」になりますが、ボタンの使い道はあまりありません。それらを色分けし、各地でボタン・インスタレーション^{*2)}を行っています。その場合に重視するのは、現地の歴史や空間を生かしたテーマで共同制作することです。高架下には、数々の個性的な商店が並びます。やはり、歴史あるファッション都市神戸では、多くが衣料品店です。準備期間は、地域に呼びかけ不要のボタンを集めます。そして、制作中は銀色の雨が降り、波紋が徐々に広がる様子をガラス越しに観ていただきます。銀の雨が、輝く金と虹色の世界に変わりますように・・・。」



図 2. 完成間近（9月末、撮影：矢野誠）

3 | 制作チーム

公募の書類審査に求められる「企画書」のコンセプトおよび作品プランとイメージは代表筆者が立案し、チームで制作することを明記した。結果が出る前に、重要なパートナーとなる建築家の共同執筆者とプランを確認し合った。入賞が決まり、制作チーム*3)は本学大学院生を核とすることで進めた。更に、代表筆者のゼミ生を補強の人員とした。作業は広範囲になるので、分担することで効率的に行っている。学生は、教員である筆者の指示に従って作業することが多いが、時には自ら考え、自分たちのアイデアやデザインによって行うこともあり、文字どおり共同作業となった。留学生を含める学生たちは、専門分野も能力も様々であり、制作を進めるなかで得意な作業を選ぶように進めた。完成までに参加した主な学生は11名となる。

4 | 会場と基本設計

インスタレーション作品の空間構成は、白い壁の美術館のようなホワイトキューブに展示されるのとは異なり、その場所の固有性を応用して作品の特性を際立たせるところにある。今回、神戸ビエンナーレ組織委員会で選択された高架下の敷地は、空き店舗の空間がそのまま残された場所と、鉄道を支える高架の構造体が露わになった土木的量感を持つ場所に二分された。その中で入賞後に、委員会から指定された会場*4)は、前者の平凡な空き店舗跡であった。床がフラットで使いやすいという点を考慮したらしいが、幸いにボタンの小ささに呼応したスケール感であった。そのため、作品を設置する空間自体は、既存のしつらえを塗装により変容させるにとどめている。会場構成で心がけたのは、会場自体も作品の一部として自分たちの手で制作できるものとし、仮設としての耐用強度を考慮しながら、道路側窓面の採光のコントロール、展示エリアと鑑賞エリアのフェンス、高架下通路側の建具といった境界部の制作を主とした。

5 | 制作のスタート

神戸ビエンナーレで最も重視されるのは人々の‘ふれあい’で、タイトルにつけられたのは“港で出会う芸術祭”

である。高架下アートプロジェクトの募集要項では、長い制作期間*5)で地域の人たちとの交流が強調されていた。今回の作品に中古ボタンを使ったのも、地元からボタンを集めることで関係を深められると考えたからだ。制作のはじめに不要のボタンをどのように集めるか、与えられたスペースを会場としてどのように使うかで検討を進めた。ボタン募集のチラシデザイン（図3）を院生の村上明栄が、会場の設計（図4）を藤山准教授の指導のもと、山上達彦が主になり行った。



図 3. ボタン募集のチラシ (A4 サイズ)

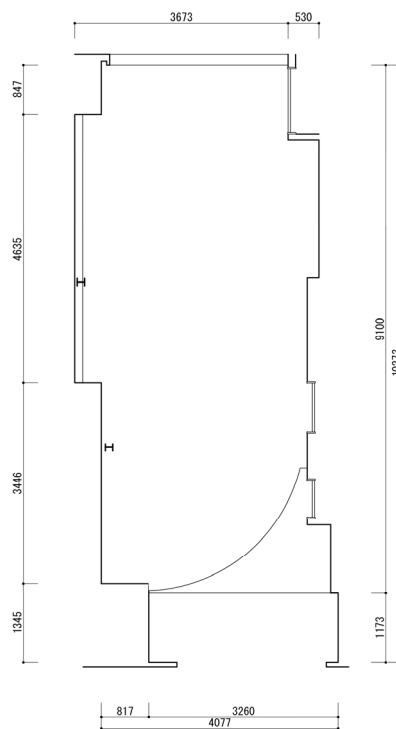


図 4. 会場平面図

制作時に着用したオリジナル T シャツにプリントしたタイトル文字（図 5）は留学生の林資穎が書いた。そして、筆者が情報を共有するためにも重要と考えたブログ“銀ボタン・金ボタン”^{*6}を開き、制作前から会期終了までのほぼ毎日掲載し続けた。

銀の雨 金の環

図 5. タイトル文字

6 | 作業とデザイン

作品コンセプトは揺らがないが、会場設計や材料選択など、完成までに決めなければならないことは多い。アート作品はデザインではないが、プランを繰り返し変更することで初期の目的を果たすことが可能だ。応募のためのアイデアスケッチ（図 6）は、あくまで単純なイメージである。無数の銀ボタンをどのように天井から吊るか、床にカラフルなボタンでどんな波紋を描くかは何度も試作と変更を重ねた。そして、現状使われない施設という条件を生かして、会場内のほぼ全てを塗装^{*7}した。インスタレーションでは、空間の性質や光の使い方が最も作品に影響を与える。初期の作業で重要なのは、入り組んだ天井や壁面に 2 度塗りの塗装を施したことである。下地にブラック、仕上げに群青色を塗る作業はゼミ生が行った。天井から無数のテグスを吊るために鉄製のネットを付ける作業、道路側のガラス面にベニヤを張って、明かりをわずかに通す工夫は建築系の院生が主に手がけた。



図 6. アイデア・スケッチ

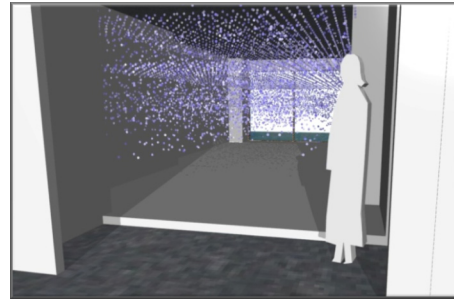


図 7. 会場シミュレーション

7 | ボタンの作業

不要ボタンの募集は 3 ヶ月間で、集計は 22,732 個だった。それらを色・種別に分別し、使うものは既にコレクションしているボタンに加えた。重要な銀のボタンは、集めたものに加えて 7 千個近くを数えた。ボタンの数が多いか少ないかの計算は難しいが、何度もシミュレーション（図 7）を試みた。ボタンの種分けや黒いテグス^{*8}を適当な長さに切る作業はゼミ生が行った。釣り用のテグスで銀色のボタンを吊る作業が最も困難であったが、ボタン並べを含めて、ミャンマーからの留学生 2 人が多に活躍した。



図 8. 制作中

2011 年 9 月 9 日



図9. 会期中（入り口付近から）



図10. 作品部分（撮影：矢野誠）

神戸ビエンナーレ2011のテーマは‘きら kira’であったので、それまであまり作品に使わなかった金・銀ボタンをメインに使用した。銀ボタンは集めたほぼ全てを、金は大量にあるので3割程度を使用した。波紋のカラーとして使ったのは、中心より透明・青・ピンク・紫・黄・赤・白・緑の8色（図10）である。色と色のつながりに金のふちを置くことで立体感を与え、光のイメージを強調した。

8 | 制作中と会期中

本作品は制作期間中も通行人たちから関心を持って視られていた。途中に、ネット越しに作業を観ることができる開き戸を手作りで設置したことで、作品が徐々に出来上がる過程を共有できた。テグスが絡むとか、床のボタンに踏み込むなどの問題が十分に予想できるので、会場の設計もその点を熟慮した。会期中は、おもに土・日曜日にシフトを組んで会場係を交代でした。事務局の配慮として、会場管理は主催者側でアルバイトを使い計画的に行ったこ

とで、大きな問題は起こらなかった。入り口に小さな棚を付け、感想ノートを置き、全国あるいは海外からの来場者からもコメントをいただいた。特に印象的だったのは、撮影を認めたことで、デジタルカメラなどで撮影する人が後を絶たなかった。モトコーは、普段の通り道として利用する人も多く、事務局の報告では期間中約2万人が訪れた。

9 | おわりに

入賞が知らされた後に、あの東日本大震災が起こった。神戸で震災を体験した筆者としては、いつにも増して作品に思いを込め作業に集中した。アート作品でできることはささやかだが、メッセージを受け取ってくれた人は少なからずいた。制作中は、会場近くの多くの食堂や喫茶で店主と交流できた。改めて、モトコーは神戸らしくユニークな場所であり、そこにある店も人も魅力的だと感じた。今回は地元開催で地の利を生かすこともできた。審査員からは、本作品が「綺麗すぎて高架下にふさわしくない」との評をいただいたが、現実が厳しいからこそ日常ではない美しさを表そうと考えた。アートとは、当たり前モノを使って、見ることのできないことを表現する技術ではないだろうか。近年はアートによる街おこしが盛んである。これまで、筆者は必ずしもアートイベントに積極的ではなかったが、アートによって人をつなぎ、場所や人と出会うことで学生たちも自身も共に成長することができる。それこそアートの持つ本来的な意義の1つである。今回の経験をふまえて、次の制作につなげて行きたいと考えている。



図 11. 会期中（2人の子と父）



図 12. 作品部分（撮影：矢野誠）

注：

- *1) 本稿 1～9 項のうち 4 項を藤山が、その他を代表の戸矢崎が執筆。
- *2) アートの一時的な表現作品であるインスタレーションは 1970 年以降一般化。筆者は 1983 年から既製品を大量に使うインスタレーション作家として知られる。
- *3) 本学大学院授業「総合プロジェクト」の 1 つとして、6 名（岩崎慶太、喜多聡、山上達彦、村上明栄、MAY ZIN HTWE、MIE MIE）が登録して作業。他に戸矢崎ゼミ生 4 名（九富理絵、関沢春人、松村侑加子、真辺孝亮）が随時作業に参加。
- *4) モトコーは JR 元町駅から神戸駅の間で約 1km に連なる。ブロックごとに 1～7、元町から通し番号 3 桁が店舗に付けられ、指定された〈6・284〉は神戸駅に近い場所。元町駅近くのエリアに比べるとシャッターが閉まる店舗の方が多い状況。
- *5) 2011 年 1 月に入賞が決まり、3 月に会場が指定され、4 月より 9 月末までの 6 ヶ月間を準備と制作に使用。
- *6) 2011 年 3 月～11 月末まで、ブログサイト <http://blog.livedoor.jp/ginbotankinbotan/> で経過などを発信した。ページのデザインは本学卒業生の畠健太郎。
- *7) 壁、天井の仕上げ色としてターナー社の「インディゴブルー」、床は「アクアブルー」を使用。一般の塗料より少し高価だが、絵の具メーカーのマットな自然色で、きれいだとい多くの観客が指摘。
- *8) 今回の幸運の一つは、一般的な商品ではない釣り用ブラック糸との出会い。通常の透明糸では照明により光ってしまうが、つや消しの黒は作品にとっても効果的。